

茅蜩

〔嬉遊笑覽禽十二〕重ねていふ聲はくつくもつよりいへばつくくとなるつくくほうしもほうしより聞なすときはほうしつくくとなれり、

〔散木弄詠集夏二〕人々まうできて歌よみけるに蟬をよめる

女郎花なまめきたてるすがたをやうつくしよしと蟬の鳴らん

〔夫木和歌抄蟬九〕屋のつまにつくくほうしのなくをき、て

我宿のつまはねよくや思ふらんうつくしといふむしのなくなる

俊頼朝臣

〔倭名類聚抄蟲十九〕茅蜩 爾雅注云茅蜩一名蠶子列反和名比久良之小青蟬也

〔箋注倭名類聚抄蟲八〕比具良之見万葉集及古今集拾遺物語曰是蟲將暮乃鳴故有是名今俗或

呼加奈加奈爾雅蠶茅蜩郭注云似蟬而小青此所引蓋舊注也說文蠶小蟬蜩也李時珍曰小而色青綠郝氏曰今此蟬形尤小好鳴於草梢也

〔類聚名義抄虫十〕茅蜩 ヒククラシ

〔伊呂波字類抄虫比〕蠶ヒククラシ 茅蜩 同

〔下學集氣上〕蠶ヒククラシ

〔八雲御抄虫三下〕ひくらし同物蟬秋近成鳴

〔倭訓栞中編二十一〕ひぐらし 和名抄に茅蜩をよめり日暮の義おもひくらしの音になくなど

よめり上總にくつはせみ又かなくといふ鳴聲鈴音の如くにして甚高し色は青緑なり本草

にもさいへり顯昭は夕つかた鳴なりといへれど朝ぼらけ日ぐらしの聲聞ゆなりともよめり

されば味爽には鳴とも日出て後は鳴かず實に暮をもて主とするをもて名を得たるなり

〔物類稱呼動物二〕茅蜩ひぐらし 上總にてくつはせみと云又かなくと云

〔和漢三才圖會五十三〕茅蜩 茅蠶當作字 和名比久良之略中